

ロシアの代替医療「39」失われたロシアの民間療法の世界 アリ療法

ユーラシアビューでは以前、ハチに刺されることで免疫力を高めるといふ「ハチ療法」を紹介した。これに似たもので、かつてロシアで広く行われていたのが、アリに体を咬ませる「アリ療法」だ。今はなきアリ療法について、ロシアのアリ研究者に聞いた。

失われた「アリ療法」を研究

かつてロシアで行われていたというアリ療法は、とくにリウマチや筋肉痛などに良いとされ、医薬品が普及していなかった時代には、アリに咬まれに定期的に田舎に出かけた人もいたという。やり方は簡単。森の中で赤アリの蟻塚を見つけたら、体の痛む箇所を蟻塚に当てる。そして、痛くて我慢



V・A・クラシリニコフ
ロシア科学アカデミー、ロシア昆虫学協会会員。チュヴァシ共和国科学・芸術アカデミー会員。生物学、化学、情報学教師

できなくなるまでアリに咬まれるのだ。アリは不思議と痛みのある箇所がわかり、そこを集中的に咬む能力があるともいわれていた。アリが活発に活動する春から夏まで隔月でこの療法を続けると、一年元気に過ごせたという。現在ではこの療法を行う人はほとんどいないが、30〜40年ほど前までは身近で行われていたと語るロシア人は多い。

ロシアのアリ研究の第一人者であるヴラジスラフ・クラシリニコフさんに、この失われたアリ療法について聞いた。



フォルミカ・ルフア (写真: PaKor)

ユヴァシ共和国マリインスキ1・ポサード市の生物学と化学の教師だ。子どものころからアリの観察を続け、アリについて400本以上の論文や記事を書き、英訳された論文もある。またロシア最大のアリ専門サイトも運営している。クラシリニコフさんの少年時代には、まだアリ治療を実践する「治療家」がいて、彼らは市販の薬や病院の処方薬を信用せず、アリ療法のほか、森の草や実、根などで治療をしたという。

「子どもの頃、アリにひどく手を咬まれたことがあります。アリが上顎で咬むと大変痛く、咬まれた箇所が赤く腫れて豆ほどの大きさにになりました。アリは死ぬときに腹からギ酸を出します。このギ酸にはアレルギーがある人がいるので、咬まれた場合には医者に見てもらふ必要があります。しかし、わたしの場合はそのときに免疫のようなものができたようで、咬まれてもさほど痛みを感じなくなりました」と、クラシリニコフさんは語る。

アリ治療の効果

薬効があると言われるのは、ロシアの森林に棲むフォルミカ属の森アカアリで、フォルミカ・ルフアとフォルミカ・ポリクテナと呼ばれるアリだ。「彼らはときに百万匹に達する家族を作り、松葉や枝でできた蟻塚を形成します。蟻塚は最高で2メートルにも達します。彼らにはいわゆる針はありませんが、よく発達した毒腺をもっていて、多量のギ酸を生産します。野生動物のなかには、イノシシのように蟻塚に寝転んで、いわゆる「アリ風呂」につかる習性をもつ動物がいます。こうすることで、アリの出すギ酸を浴び、体表の寄生虫を追い出すのです」。フォルミカ・ルフアとフォルミ

(左) フォルミカ・アキノニアのアリ塚 (写真: L・G・Celishcheva、キーロフ州)
(右) フォルミカ・ルフアのアリ塚 (写真: A・V・Gilev、ハンティ・マンシ自治管区)



カ・ポリクテナは共にロシアや東ヨーロッパを中心としたヨーロッパに生息するアリだ。クラシリニコフさんによると、ギ酸はリウマチ一般、リウマチ性関節炎、骨・関節痛に効果があり、これに含まれるさまざまな物質は体質を強化したり免疫を高めるといふ。

クラシリニコフさんが

勧める安全で手軽な方法を紹介しよう。「蟻塚からアリを塚ごと集めてガーゼに包み、アリをその中に閉じ込めます。それを痛みのある箇所に30分から1時間ほど当てるのです。5回ほど繰り返すと効果が表れます。また、蟻塚に向かってかがみ、ギ酸を含む空気を深く吸うというのも良い方法で、気管支炎や結核などに効きます。また、静脈瘤には、生きたアリと赤ピーツの切れ端、ウオッカをそれぞれ等量混ぜた溶液が効くとされています。また高血圧には、乾燥させ

たアリとハチミツを混ぜたものをなめるのが良いと言われます。クラシリニコフさんは自分の健康とアリの関係についてこう語る。「わたしは、研究活動のなかで半世紀近くアリとつきあっています。無論アリに咬まれ続けていますが、本業の教員の仕事を病気で休んだことは一度もありません。それがなぜかは神様のみが知ることでしょう。でも、森と蟻塚の香り、ギ酸の匂いは私の生活とは切



フォルミカ・ルフア (写真: Urman)

っても切れないものなのです。クラシリニコフさんによれば、この民間療法に関する学術的な研究はな

※ここで紹介したアリ療法はロシアのアリを使ったものです。アレルギーなどの危険性もあるので、絶対に真似しないで下さい。

モスクワ大学土壌研究学部研究員 Yu・V・ザカリューキナさんインタビュー

ザカリューキナさんは、スコルコヴォ研究所との共同研究で、ロシアの黒アリの腸から抗がん作用をもつ自然の抗生物質ナイボマイシンをつくる放線菌の新しい菌株の抽出に成功し、ニュースでもとりあげられた。



「多くのアリ、とくにフォルミカ属のアリは、下腹部にある腺から浸食性のある液体を出し、自分の体長の20倍も離れたところまでこの液体を〈発射〉することができます。彼らはこの方法で他の昆虫を襲い、天敵から身を守ります。またこの液体は抗微生物作用をもっています。この液体の主な成分はギ酸です。ギ酸は1671年にイギリスの博物学者ジョン・レイによって森アカアリから検出されました。その後、この物質はハチやクラゲ、イラクサ、針葉樹の葉、そしていくつかのフルーツにも含まれていることが分かりました。

10%程度の濃度のギ酸が体につくと炎症作用が起こり、ひどい痒みが生じて皮膚が赤くなります。それ以上の濃度のギ酸は、皮膚の化学損傷を引き起こします。痛みや炎症を伴う場合、ロシアの民間療法では痛む患部にアリをあてがって咬ませます。少なくともギ酸が皮膚の受容体に及ぼす効果が痛みから気をそらせ、また血管が広がることで組織への栄養補給が改善され、体を温める効果もあります。ただし、アレルギーのある人はこの療法には注意が必要です」。